

ヘブライ語のシュワーに見られる プロソディー化と脱プロソディー化*

池田 潤（筑波大学）

キーワード: 聖書ヘブライ語、現代ヘブライ語、マソラ、
シュワー、プロソディー

1 はじめに

ヘブライ語はセム語族に属し、聖書時代から今日まで 3000 年以上にわたる長い歴史を有する。その歴史は大まかに次のように区分することができる¹。

- 聖書ヘブライ語（前 2 世紀まで）
ヘブライ語聖書の子音テキストが成立した。
- ミシュナ・ヘブライ語（前 2 世紀から後 5 世紀まで）
日常的な話し言葉としては使われなくなった。
- 中世ヘブライ語（5 世紀から 19 世紀末まで）
マソラ学者によって母音記号が考案された。
- 現代ヘブライ語（19 世紀末以降）
死語からの「復活」をとげて現在に至る。

ヘブライ語史におけるシュワーの変遷を追い、その過程をプロソディー化

* 本研究に際し、文部科学省の科研費（16520227）「現代ヘブライ語の音韻体系に対する実験音声学研究」（研究代表者：池田潤、平成 16-17 年度）の助成を受けた。

¹ 詳しくは、佐々木（1999）参照。

という観点から捉えることが本稿の目的である。

シュワー²というのはヘブライ文字³に書き添えられる母音記号(表1)の名称である。

表 1:ヘブライ文字の母音記号⁴

記号	.	..	˙	-	˘	.	..
名称	ヒリク	ツェレ	セゴル	パタハ	カメツ	ホレム	クブツ
音価	/i/	/e/	/ɛ/	/a/	/ɔ/	/o/	/u/

記号	˘			
名称	シュワー	ハタフ・セゴル	ハタフ・パタハ 複合シュワー	ハタフ・カメツ
音価		∅		

したがって、ヘブライ語におけるシュワーは音声学的な概念ではなく、純粋に文字素論的な概念だと言える⁵。ところが、この語が言語学や音声学の専門用語として借用された際に、音声学的な概念へのすり替えがおこなわれ、この字素が表記したと称される音のひとつである [ə] がシュワーと呼ばれるようになった。その結果、ヘブライ語以外の言語を問題にする場合にはシュワーという用語に誤解の余地はないものの、「ヘブライ語のシュワ

² ヘブライ語で「シュワー記号」を意味する *šva* という語は *šav* 「偽の、空の」から派生したと考えられる。別な語源解釈の可能性については、Joüon & Muraoka (1993: 51) を参照。

³ ヘブライ文字は子音型(福盛・池田 2002 参照)であり、原則として母音を表記しない。ただし、一部の子音文字を母音の補助表記として用いることがある。

⁴ 母音記号が考案された時期については諸説あるが、後 7~8 世紀頃とする説が有力である(佐々木 1999: 14, 注 16)。かつては複数の方式が存在したが、今日まで使われているのはここに示したティベリア式のみである。音価は推定によるものであり、音素表記してある。詳しくは Khan (1997) を参照。ヘブライ語聖書の翻字は筑波方式(池田他 2003 参照)に従う。

⁵ 母音記号の背後には何らかの音声実体が存在するはずであるが、後述するようにそれは一枚岩ではない。そのため、母音記号のシュワーは音声実体を保留して字素として扱うほかはない。文字素、字素、文字素論については、池田(近刊予定)参照。

ー」に限っては、それが音なのか字素なのかがはっきりしないという状況が存在する。そこで、本稿では前者をシュワー音、後者をシュワー字素と呼び分けることにする⁶。また、転写の際にはシュワー字素は@で示し、複合シュワーは対応する基本母音を肩に上げて示すことにする。

2 母音記号考案以前のヘブライ語におけるシュワー音

言うまでもなく、母音記号が考案される以前にシュワー字素は存在しない。そのため、聖書ヘブライ語とミシュナ・ヘブライ語でシュワー字素を問題にすることはできない。しかし、シュワー音はこれらの言語においても存在したと考えるのが自然である。それには2つの理由がある。第1に、アクセントのない音節で母音がシュワー音化を経て消失する現象は他言語でも観察されるため⁷、ヘブライ語でも同様の変化が起こったと想定しても不自然ではない。第2に、中世ヘブライ語の時代にシュワー字素が考案されたのは、ミシュナ・ヘブライ語までに基本母音とは異なる母音が発生していたためだと考えられる。この母音はアクセントのない音節に分布するため、シュワー音ないしゼ口音とみなすのが順当であろう。

2.1 ヘブライ語聖書の子音テキスト

聖書ヘブライ語はヘブライ語聖書によって代表される文字言語である。ヘブライ語聖書は子音文字によって表記された。母音は暗唱され、口伝えで継承された。後に考案された母音記号はヘブライ語を母語としない中世のユダヤ人が聖書をどう朗読していたかを示すもので、聖書時代の母音を正確に記録しているわけではない。写本に記された子音と母音の間に千年以上の隔たりがあるという点でヘブライ語聖書は非常に特殊な言語データだと言える。

⁶ これまで筆者はシュワー字素のことを「歴史的シュワー」と呼んできたが、この用語はシュワー字素が過去のある時点で常に [ə] に対応したという誤解を与えかねないため、万全とは言えない。注5で述べたように、シュワー字素の音声実体は不明である。したがって、「歴史的シュワー」がシュワー音であったという確証はない。

⁷ Hock (1991: 86-7) 参照。

上記の理由から、聖書の写本に書き込まれた母音記号から聖書ヘブライ語の母音に関する情報を得ることはできない。聖書ヘブライ語の情報はヘブライ語聖書の子音テキストに限定される。そのため、そこから得られる母音に関する情報は非常に限られている。唯一の手がかりは子音文字による母音の補助表記 (matres lectionis) である。たとえば、<w>によって u や o を、<y>によって i や e を、<ʔ>によって a を表記することがあるが⁸、いずれの文字素も後のシュワー字素に対応する母音を補助表記することはない。したがって、聖書ヘブライ語にはシュワーに関する直接の証言は存在しないことになる。我々に言えることは、母音の補助表記が存在すれば、そこにはシュワーがなかったということだけである。

2.2 ギリシア文字による転写

オリゲネス (Origenes Adamantius 182?-251) が編纂した『ヘクサブラ』⁹の第2欄にはヘブライ語聖書がギリシア文字で転写されている。別の音韻体系に立脚する文字による転写であるためその扱いは慎重を要するが、ギリシア文字は母音を表記し、そこに転写された母音はマソラの母音記号よりも古い場合、ヘブライ語の母音に関する貴重な資料であることは間違いない。

『ヘクサブラ』では、後にシュワー字素によって表記される母音は多くの場合まったく書かれないが (ゼロ表記)、ε やまれにそれ以外の母音 (α など) によって表記されることもあるという¹⁰。Yuditsky (2005) によると、ε や α で表記される場合、それらはシュワー音化が起こる前の母音に一致するという。たとえば、σεμω 「彼の名」(š@mo) は šem という語幹に o という人称接尾辞が付いた語形である。また、νακαμωθ 「復讐」(n@kəmoθ) は

⁸ <> は文字素を示す。補助表記されるのは長母音が多いが、まれに短母音も表記される。詳しくは、Andersen & Forbes (1986: 81-100) 参照。

⁹ ヘブライ語聖書の6種類のテキストを対照した書物で、第1欄にヘブライ語テキストが収録され、第2欄にそれがギリシア文字で転写されている。第3~6欄はヘブライ語テキストのギリシア語訳を収める。

¹⁰ Sáenz-Badillos (1996: 84) および Chomsky (1971: 34f.) 参照。Joüon & Muraoka (1993: 52) によると、後述する有音シュワーを含む例は270あり、そのうち184例がゼロ表記をとっているという。

*nəkəm-という語基をもつ。したがって、オリゲネスの時代にはアクセントのない音節の母音のシュワー音化ないし消失がまだ完了しておらず、一部の形には起源的な母音が残っていたものと思われる。

3 ティベリア式母音記号におけるシュワー字素¹¹

マソラ学者はシュワー字素に大きな関心を寄せ、*diqduqe ha-tešamim* (アクセント符号の決まり) や *Treatise on Shewa* (シュワーに関する論考) を初めとする数多くの著作においてシュワー字素の問題を論じている。彼らの主たる関心事は次の2点であった。

- (1) シュワー字素は有音の場合と、無音の場合とがある。この区別は聖書を正しく朗誦するために不可欠であった。
- (2) マソラ学者はシュワー字素自体に音節主音性がないと考えていた¹²。有音のシュワー字素がついた子音は直後の母音を核とする音節のオンセットとなり ($\$C@CVC_0\$$)、無音のシュワー字素がついた子音は直前の母音を核とする音節のコーダとなる ($\$C_0VC_0C@\$$)。シュワー字素が有音か無音かの区別は音節の切れ目を決定するために不可欠であった。

3.1 有音・無音の区別

シュワー字素は次の環境で有音となる。

- (3) 語頭子音に付された@ : e.g. š@bu 「座れ」
- (4) 語中の -C@C@- における2番目の@ : e.g. tis@p@ru 「あなたたちが数える」
- (5) 語中のダゲツシュ¹³つきの子音に付く@ : dibb@ru 「彼らが話した」

¹¹ 本節の記述は特にことわりがない限り Yeivin (1980: 275f.) に基づく。

¹² Yeivin (1980: 275-276) および Khan (1997: 93-95) 参照。

¹³ 伝統的には重ね子音化 (gemination) を示す記号とされ、ここではその解釈に従う。別の解釈の可能性については、池田 (2003: 19-20) 参照。

有音のシュワー字素の既定値は非常に短い [a] である。(3)から(5)の例の @ (太字) はすべて [a] と読まれた。このほかに、次のような異音も存在した。

(6) i / _y : e.g. b@yom [biyom] 「日に」

(7) V_i / _?V_i : e.g. b@?er [be?er] 「井戸」, m@?od [mo?od] 「とても」

これらは音環境から予測のつく位置異音であるため、有音のシュワー字素の位置に現われる母音の間に示差的対立はないことになる¹⁴。さらに、語頭子音に付された@は例外的に無音となることもある。

(8) š@tayim [štayim] 「2(数詞)」

シュワー字素が一貫して無音となるのは語末の環境である。

(9) e.g. lək@ 「貴女に」

また、語中子音に付された@は、(4)(5)以外の場合、無音となることが多い。

(10) e.g. uz@hab 「～と金」, tis@p@ru 「あなたたちが数える」

ただし、語中の r や l に付された@はこの条件を満たしていても有音となることがある¹⁵。

(11) mer@pīdīm 「レフィディム(地名)から」, ?el@ka 「私は行きたい」

¹⁴ 後述するように、現代ヘブライ語の#CCVC₀という音節のオンセットを構成する2つの子音の間には組み合わせによって話し手や聞き手も気付かないほど短い母音が挿入されることがある。通常の母語話者は気付かない母音を中世のヘブライ語学者が聞き取って表記したものがシュワー字素ではないだろうか。

¹⁵ シュワー字素の解釈はガヤないしメテグと呼ばれる符合によっても影響を受けるが、本稿ではこの問題には踏み込まない。

3.2 シュワー字素に反映されたプロソディー化

上記の事実を整理すると、シュワー字素は、起源的に明瞭母音であったが、アクセントのない環境で音質の対立を失ったり、消失したりした結果、音節主音性を失った音を表記していたことになる。シュワー字素によって表記された音に起こった変化は、英語の [ə] に起こったプロセスによく似ている。島田 (近刊予定) によると英語におけるシュワー音化には次の3段階があるという。

- (12) a. 非強勢音節の母音の音質の区別が失われる。
- b. 分節音の特徴が消失し、音節核の表示のみになる。
- c. 音節核の表示が消失する。

島田はこのプロセスをプロソディー化と呼び、英語の「[ə]は母音でありながら『弱さ』というプロソディーの表示に特化した音である」と結論付ける。

ヘブライ語の場合、(12b)の段階を実証するのは困難であるが、(12a)と(12c)は3.1において確認された。したがって、ヘブライ語でもプロソディー化が起こり、シュワー字素は分節音ではなく「弱さ」というプロソディーを表示する字素として考案されたと考えることができるだろう。そう考えれば、シュワー字素がなぜこれほど多価的なのか説明が付く。さらに、これに関して興味深い事実を2つ指摘しておきたい。

まず、マソラ学者は母音記号のほかに抑揚、休止、アクセント等を示すプロソディー記号を考案している¹⁶。この休止を示す記号のひとつにシュワー字素は酷似している。大休止を示すソフ・パスク(行末に配置)と中休止を示すザケフ・カトン(子音文字の上に配置)はシュワー記号(子音文字の下に配置)と同じ形をしている¹⁷。シュワーの表記にソフ・パスクやザケフ・カトンと同じ形の字素を採用したのは、これらにプロソディーを表示するという共通点があったからではないだろうか。

¹⁶ プロソディー記号に関しては、池田(2006)を参照。

¹⁷ Joüon & Muraoka(1993: 51)にも同様の指摘がある。

次に、シュワー字素をセゴル、パタハ、カメツと組み合わせると、複合シュワーとなる（表 1 参照）。これらは有音のシュワー字素の異音（3.1 参照）を表記する異文字（allograph）である¹⁸。シュワー字素が何らかの母音を示したなら、2つの字素を組み合わせると長母音、連母音、二重母音などを表記するのが写像的に言って自然であろう。ところが、複合シュワーは通常のエゴル、パタハ、カメツよりも短いシュワー字素の異音を表記している。この事実も、シュワー字素が分節音ではなく「弱さ」プロソディーを表記していると考えれば説明が付く。

4 現代ヘブライ語におけるシュワー字素とシュワー音

表 1 に示した母音のうちツェレとセゴルが /e/ に融合し、カメツが /a/ と /o/ に分裂した結果、現代ヘブライ語の基本 5 母音が成立した¹⁹。その際、ハタフ・セゴルは /e/ に、ハタフ・パタハは /a/ に、ハタフ・カメツは /o/ に融合している。シュワー字素は基本的に \emptyset （ゼロ）となったが、次のような音環境では /e/ として実現されるという²⁰。

(13) sonority hierarchy に反する不自然な子音配列を避ける。

例：*yladim “children” yeladim (cf. klavim “dogs”)

(14) 同一ないし homorganic な子音の連続を避ける。

例：*avád+ti “I worked” → avádeti (cf. katav+ti “I wrote”)

例：*xagg+a “she celebrated” → xageg+a (cf. katv+a “she wrote”)

(15) その他、発音しにくい子音連続を避ける。

例：*btixut “safety” → betixut; *šzufa “tanned (女性単数形)” → šezufa

¹⁸ 喉音に対して体系的に用いられるほか、異音の特定が難しそうな場合には喉音以外の子音に対しても散発的に用いられた。詳しくは、Yeivin (1980: 282-284) および Khan (1997: 95-96) 参照。

¹⁹ 現代ヘブライ語の基本母音については、高他 (2002) 参照。

²⁰ Sh. Bolozky 教授（米国マサチューセッツ大学）のご教示による。なお、上で述べたようにシュワー字素の既定の発音はティベリアの伝統では a であったが、後にスペイン北部のスファラディー系ユダヤ人の中で e に変化した（Zurawel 1998 参照）。現代ヘブライ語における母音の発音は後者の伝統を引き継いでいる。

語頭の子音連続に関しては、Rosén (1966: 4) が音環境別に歴史的シュワーがどのように実現されるかを一覧表にまとめている (表 2)。しかし、現代ヘブライ語においてシュワー字素がどう発音されているかを音響実験によって確認したところ²¹、ゼロか /e/ かという図式は過度の単純化であることが判明した。

表 2：現代ヘブライ語における #C@C- の発音 (Rosén 1966 より)

Second consonant	<i>r, l, n</i>	<i>y</i>	<i>m</i>	<i>H</i>	<i>g, d, k, t</i>	<i>š, s, z, ʕ</i>	<i>v, f</i>	<i>h, ʾ</i>
First consonant <i>b, p</i>	br, bl, bn pr, pl, pn	by py		bH pH	bg, bd, bk, bt pg, pd, pk, pt	bš, bs, bz, bʕs pš, ps, pz, pʕs		b ^o h, b ^e p ^o h, p ^e
<i>g, d, k, t</i>	gr, gl, gn dr, dl, kr, kl, kn tr, tl, tn	dy ty	gm dm km tm	dH kH tH	gd, gt dg, dk kd, kt tk	gš, gs, gz, gʕs dš, ds kš, ks, kz, kʕs tš, ts, tz	gv, gf dv, df kv, kf tv, tf	g ^o h, g ^e d ^o h, d ^e k ^o h, k ^e t ^o h, t ^e
<i>š, s, z, ʕ</i>	šr, šl, šn sr, sl, sn zr, zl, zn ʕr, ʕl, ʕn	šy sy	šm sm zm ʕm	šH sH zH ʕH	šg, šd, šk, št ² sg, sd, sk, st zg, zd, zk ʕd, ʕk, ʕt	šʕz	šv, šf sv, sf zv, zf ʕv, ʕf	š ^o h, š ^e s ^o h, s ^e z ^o h, z ^e ʕ ^o h, ʕ ^e
<i>m</i>	m ^(*) r, m ^(*) l, m ^(*) n			m ^(*) H	m ^e g, m ^e d, m ^e k, m ^e t	m ^e š, m ^e s, m ^e z, m ^e ʕ		m ^o h, m ^e
<i>v, f¹</i>	fr, fl ¹	fy ¹						
<i>r, l, n, y</i>	y ^e r, y ^e l, y ^e n		r ^e m l ^e m ny n ^e m y ^e m	l ^e H	r ^e g, r ^e d, r ^e k, r ^e t l ^e g, l ^e k, l ^e t n ^e g, n ^e d, n ^e k, n ^e t y ^e d, y ^e k, y ^e t	r ^e š, r ^e s, r ^e z, r ^e ʕ l ^e š, l ^e s n ^e š, n ^e s, n ^e z, n ^e ʕ y ^e š, y ^e s, y ^e z, y ^e ʕ	r ^e v, r ^e f l ^e v, l ^e f n ^e v, n ^e f y ^e v, y ^e f	r ^o h, r ^e l ^o h ³ , l ^e n ^o h, n ^e y ^o h, y ^e
<i>H</i>	H ^a r, H ^a l, H ^a n		H ^a m	H ^a H	H ^a g, H ^a d, H ^a k, H ^a t	H ^a š, H ^a s, H ^a z, H ^a ʕ	H ^a v, H ^a f	
<i>h, ʾ</i>	h ^a r, h ^a l, ʾar, ʾal, ʾan	ʾay	h ^a m, ʾam	ʾaH	h ^a g, h ^a d ʾag, ʾad, ʾak, ʾat	ʾaš, ʾas, ʾaz, ʾaʕ	h ^a v, h ^a f ʾav, ʾaf	

²¹ 福盛・池田 (2004, 2005, 近刊予定) 福盛 (2005, 近刊予定) を参照。現在、これらを収録した研究成果報告書を準備中である。

4.1 シュワー字素に見られる脱プロソディー化

福盛・池田 (2004) で音響解析した t@fisa 「把握, 理解」の@は無音であった。ところが, 同じ語頭子音の組み合わせであってもたとえば t@fazer 「ばらまく」(2 人称男性単数形) の@の位置には e が現れることが知られる。この違いには類推による水準化が関わっている。つまり, 動詞の接頭辞 t@+ の場合, t@+ の後にはあらゆる子音が現われうる。また, t@+ は y@+ や n@+ とともに人称活用のパラダイムを成している。そのため, tf- そのものは sonority hierarchy にも違反せず, とくに発音しにくいわけでもないが, yf- や nf- は sonority hierarchy に違反し, tn- の間にはわたり母音を入れた方が発音しやすくなる。起こりうるすべての子音の組み合わせに対応できるような水準化をおこなうとしたら, tC- よりも teC- の方がより適正な候補となる。

シュワー字素の発音については語彙化されている側面も無視できない。たとえば, ティベリア式の発音では複合シュワーは音環境に応じて使い分けられていた。

(16) ハタフ・セゴル /ʔ_ : e.g. leʔ^εkol 「見ること」

(17) ハタフ・パタハ /ʕ_ : e.g. laʕ^asot 「すること」

咽頭音が母音の低舌化を引き起こすのは音声学的に自然な現象だと言える。しかし, 現代ヘブライ語では ʔ が ʕ に融合しているため, (16) (17) に見られるような複合シュワーの使い分けの条件は消失している。それにもかかわらず現代ヘブライ語でこの区別が保持されているのは, ハタフ・セゴルとハタフ・パタハの区別が語彙化されているからにほかならない。

さらに, 上の (6) (7) で見たシュワーの位置異音は, 現代ヘブライ語においては /e/ に一本化されている。

(6') e / _y : e.g. b@yom [beyom] 「日に」

(7') e / _ʔ : e.g. b@ʔer [beʔer] 「井戸」, m@ʔod [meʔod] 「とても」

福盛 (近刊予定および本誌所収) によるとこの e は明瞭母音の e と同一

ではないが²²、明らかに音質の幅が狭まっている。また、持続時間長に有意差がないため、どちらにも音節主音性があるとみなすことができる。

これらの特徴は (12) で見たプロソディー化に逆行する流れだと言える。(12) との違いを対比させると次のようになる。

- (12') a. 母音の音質の区別が語彙化される。
c. 音節核の表示が回復する。

したがって、かつてヘブライ語に起こったプロソディー化が現代ヘブライ語の「復活」の過程で取り消されたことになる。島田 (近刊予定) はプロソディー化を「英語に内在的な指向性変化の 1 つ」と捉えているが、ヘブライ語においてプロソディー化は一時的な変化に終わったのであろうか。

4.2 現代ヘブライ語における再プロソディー化

現代ヘブライ語にはシュワー字素とは別にシュワー音が存在する。アクセントをとらない基本母音 (とくに /e/) は自然な発話でシュワー音化することがある。たとえば, (18) は (18') を早口で発話した例である²³。

(18) veáz əm əmínu febəmət yeʃ axbár

(18') ve+ʔáz hem heʔemín+u fe+be+ʔemét yeʃ ʔaxbár
and+then they believed+they that+in+truth there-is mouse
“and then they believed that there is indeed a mouse”

上で述べたように、現代ヘブライ語の /e/ にはティベリア式母音記号のツェレ、セゴル、ハタフ・セゴル、シュワー字素 (有音) という 4 種類の母音が融合している。(18) を見ると、シュワー音化は /e/ の起源を差別せず

²² 福盛 (本誌所収) はスペクトログラムの目視により、福盛 (近刊予定) は持続時間長とフォルマント周波数の観点からこれらの母音を比較している。

²³ Bolozky 教授のご教示による Corpus of Spoken Israeli Hebrew (CoSIH) からのデータ。CoSIH の詳細については Izre'el and Hary (2000) 参照。

に起こっているようである²⁴。

ティベリア式の発音でプロソディー化した音がいったん現代ヘブライ語において脱プロソディー化してから、再びプロソディー化している例もある。上で述べたように、t@+という接頭辞は水準化によって te+ に脱プロソディー化した。ところが、この /e/ が消失する現象 (19) が見られる。消失は /i/ にも起こるが (20)、/a/ には起こらない (21)。

(19) telamed > tlamed 「教えて!」(男性単数形)

(20) tisgeri > tsgeri 「閉じて!」(女性単数形)

(21) taxjevi > *txjevi 「見せて!」(女性単数形)

これがプロソディー化であると考えられるのは、上記 (12a) と (12c) の特徴に合致するからである。まず、福盛・池田 (2004) によると、Rosén (1966: 4) がゼロとする #C@C- の組み合わせの中に実は非常に短いながらも母音が出現するものがある。この超短母音は@1 と@2 に大別できる。@1 と@2 の F1-F2 値を@に対応する他の母音および明瞭母音の /a/・/e/ とともに音響ダイアグラムに示すと図 1 のとおりである。

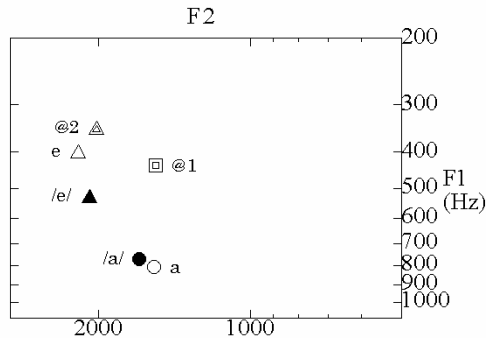


図 1 : @ に対応する母音の F1-F2 音響ダイアグラム
福盛・池田 (近刊予定) より

²⁴ am < hem, bəmət < bəmet < beʔ^hmet, əmínu < hemínu < heʔ^hminu.

これを見ると@1 と@2 は音響的にかなり異なる母音であるが、Rosén がこれらをゼロと分類することからも分かるように現代ヘブライ語母語話者はそもそもこの母音の存在に気付いていない。存在に気付いていないということは、それらの母音の音質を区別していないのはもちろんのこと、これらの母音が音節核にもなりえないことを意味する。

5 おわりに

本稿では、ヘブライ語におけるシュワーをシュワー音とシュワー字素とに分けたうえで、聖書ヘブライ語から現代ヘブライ語までのシュワーの変遷をたどり、そのプロセスをプロソディー化という観点から捉えてみた。本稿の結論は次の3点である。

- 母音記号の考案以前にヘブライ語にプロソディー化が起こり、シュワー字素は「弱さ」というプロソディーを表示する字素として考案された。
- 現代ヘブライ語ではシュワー字素で表記される母音が脱プロソディー化した。
- 脱プロソディー化した母音が再びプロソディー化している例も見られる。したがって、プロソディー化はヘブライ語においても内在的な指向性変化の1つだと考えることができる。

【参考文献】

Andersen, Francis I., and A. Dean Forbes (1986) *Spelling in the Hebrew Bible*. Rome: Biblical Institute Press.

Chomsky, William (1971) 'The pronunciation of the shewa'. *Jewish Quarterly Review* 62: 88-94.

福盛貴弘 (近刊予定)「現代ヘブライ語における歴史的シュワーのゆれ」『語学教育研究論叢』23.

・池田潤 (2002)「文字の分類案：一般文字学の構築を目指して」『一

一般言語学論叢』4・5: 33-56.

・池田潤 (2004) 「現代ヘブライ語のシュワーに対する音響音声学的記述」『一般言語学論叢』7: 29-52.

・池田潤 (2005) 「現代ヘブライ語におけるシュワーの音響解析」『第19回日本音声学会全国大会予稿集』19-24.

・池田潤 (近刊予定) 「現代ヘブライ語における歴史的シュワーの音響解析」『オリエント』48.2.

Hock, Hans Henrich (1991) *Principles of historical linguistics*. 2nd, rev. and updated ed. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

池田潤 (2003) 「楔形文字における子音の重ね書きについて」『一般言語学論叢』6: 17-32

(2006) 「ユダヤのプロソディー符号」音の百科事典編集委員会(編)『音の百科事典』920-923. 丸善.

(近刊予定) 「文献言語学序説」橋本邦彦他(編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版.

・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について: 文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-105.

Izre'el, Shlomo and Benjamin Hary (2000) 'The Corpus of Spoken Israeli Hebrew'. MS. <http://www.tau.ac.il/humanities/semitic/cosih.html>

Joüon, Paul, and Takamitsu Muraoka (1993) *A grammar of Biblical Hebrew*. Translated and revised by T. Muraoka. Reprint with corrections. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblio.

Khan, Geoffrey (1997) 'Tiberian Hebrew phonology'. In: A. S. Kaye (ed.), *Phonologies of Asia and Africa*. Vol. 1: 85-102. Winona Lake: Eisenbrauns.

高慧禎・福盛貴弘・仁函雅・李起龍・池田潤 (2002) 「現代ヘブライ語の母音に関する音響解析」『言語学論叢』21: 1-19.

Rosén, Haiim B. (1966) *A textbook of Israeli Hebrew*. Second corrected edition. Chicago: University of Chicago Press.

Sáenz-Badillos, Angel (1996) *A history of the Hebrew language*. Translated by

John Elwolde. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

佐々木嗣也 (1999) 「ヘブライ語の口頭伝承について」『ユダヤ・イスラエル研究』17: 10-15.

島田武 (近刊予定) 「プロソディーとしての英語の schwa」橋本邦彦他(編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版.

Yeivin, Israel (1980) *Introduction to the Tiberian Masorah*. Translated by E. J. Revell. Missoula: Scholars Press for the Society of Biblical Literature and the International Organization for Masoretic Studies.

Yuditsky, Alexey (2005) ‘Reduced vowels in the transcriptions from Hebrew in the *Hexapla*’. *Lešonénu* 67: 121-141. (Hebrew)

Zurawel, Talma (1998) ‘The *šěwā* in Maimonides’ commentary to the Mishna (Autograph)’. In: M. Bar-Asher (ed.), *Studies in Mishnaic Hebrew*. (Scripta Hierosolymitana, vol. 37) 408-416. Jerusalem: Magnes Press. Cambridge [England] ; New York : Cambridge University Press.

Prosodication and Deprosodication in Hebrew Schwa

IKEDA Jun

The aim of this paper is to pursue the development of the Hebrew schwa from the stage of Biblical Hebrew up to the present and to understand the development in terms of prosodication. We have come to the following conclusions:

- Prosodication took place in Hebrew before the vocalization marks were invented. The schwa symbol was then created as a marker of “weakness” rather than that of a vocalic segment.
- In Israeli Hebrew, the vowels indicated by the schwa symbol went through deprosodication process.
- Reprosodication of deprosodicated vowels is attested in Israeli Hebrew. This suggests that prosodication should be a directional change inherent in the Hebrew language.

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: ji@lingua.tsukuba.ac.jp